

## (474) 大径ラインパイプ用高韌性低炭素当量X80厚鋼板の開発

川神戸製鋼所 加古川製鉄所 (工博) 笠松 裕 梶 晴男  
秋山憲昭 ○山内 学

## 1. 緒 言

寒冷地向ガスラインパイプ用鋼板としては現在X70級までのものが大量に使用されているが、ガス輸送効率の面から、今後、より一層の高強度のものが要求される傾向にある。この要求に応えるX80鋼板として従来から公表されているいくつかの鋼板は、炭素当量( $C_{eq}$ )が高く、いずれも約0.46以上である。<sup>1)</sup>当社では $C_{eq} \leq 0.45$ を目標に、適切な化学組成と圧延条件を選択し、溶接性と低温韌性の優れた低 $C_{eq}$ のMo-Nb-V系X80鋼板を開発した。本報ではその開発鋼の概要について報告する。

## 2. 製造方法

試作鋼の化学組成をTable 1に示す。 $Mn$ を1.3%以下としてアシキュラリティーの増加による降伏点の低下を抑えるとともに、Nbを0.05%、Vを0.07%添加して析出強化能を高め、さらにC、Sを低く抑えて高韌性を確保した。通常の分塊工程を経た後、Nbによる析出強化を最大限利用するため、スラブ加熱時に添加したNbが完全固溶するように加熱温度を設定し、Table 2に示す条件で一回温調制御圧延を行ない板厚19mmに仕上げた。

## 3. 材料特性 (Table 3)

圧延後の組織はPhoto.1に示すごとく、ASTM粒度No.10以上の微細なフェライトとペーナイトからなり、 $C_{eq}$ が0.42と低いにもかかわらずAPI 5LU-U80の強度スペックを満足し、伸び値も良好である。 $-20^{\circ}\text{C}$ でのシャルピー吸収エネルギーは15kgf·m以上であり、DWT Tの85%SAT Tは $-48^{\circ}\text{C}$ 以下を示し、優れた低温韌性を有している。また最高硬さは $Hv10 \leq 280$ であり、溶接性もきわめて良好である。なお本鋼板に制御圧延後の制御冷却を適用すれば、組織は微細なペーナイトとなり、韌性を劣化させることなく約6kgf/mm<sup>2</sup>以上の強度上昇を図ることが可能である。この結果についてもあわせて報告する予定である。

## 4. 結 言

適切な化学組成と制御圧延条件を選択することにより、極寒冷地向ライ  
ンパイプ用素材に適した低温韌性を有し、X80級の高強度を満足する低 $C_{eq}$   
Mo-Nb-V系厚鋼板を製造することができた。また本鋼板に制御冷却を適用することにより、韌性を  
劣化させることなく強度上昇を図ることが可能であることを確認した。

## 参考文献

1)たとえば Kasamatsu et.al : Proc. Int. Conf. Steel Roll (1980) vol. 2 P. 1016

Table 1. Chemical composition (wt %)

C	Mn	P	S	Cu	Ni	Cr	Mo	Nb	V	$C_{eq}^{(2)}$
0.07	1.27	0.014	0.002	0.25	0.25	0.24	0.19	0.051	0.072	0.42

2)  $C_{eq} = C + 1/6Mn + 1/5(Cr + Mo + V) + 1/15(Cu + Ni)$

Table 2. Condition of controlled rolling

Slab thickness (mm)	Slab reheating temperature (°C)	Reduction above 950°C (%)	Reduction below 780°C (%)
238	1170	67	76

Table 3. Mechanical properties (T-direction)

Plate thickness (mm)	Tensile test			Charpy impact test		Drop weight tear test	
	YS (kgf/mm <sup>2</sup> )	TS (kgf/mm <sup>2</sup> )	EI (%)	vE-20 (kgf-m)	vTrs (°C)	S.A.-20 (%)	85% SATT (°C)
19	57.6	71.1	22.8	15.2	-103	100	-48

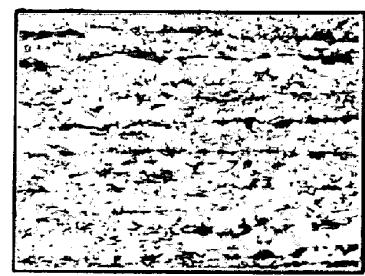


Photo.1 Microstructure